

博士（人間科学）学位論文 概要書

乳児の歩行発達への生態学的アプローチ

Ecological Approach to
the Development of Infant Walking

2009年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

白神 敬介

Shiraga, Keisuke

研究指導教員：根ヶ山 光一 教授

問題と目的（第1章）

近年の歩行発達研究では、乳児の遺伝的、神経・解剖学的視点のみに留まらない知覚、認知、学習、生体力学といった観点から歩行発達が取り上げられるようになり、発達プロセスにおける多様性や個人差が積極的に論じられるようになった。

しかし、依然として個体発達の枠組みは強く残っているという問題を指摘できる。歩行発達研究の創成期から、子どもが独りで歩けるようになる過程は、常に個体能力として捉えられてきた。歩行発達は生活体の環境からは切り離された文脈において取り上げられることが多い。そのため、生活体の環境を含めた発達プロセスの記述が必要とされる。

そこで、本論の目的は、これまで乳児の個体発達として記述されてきた歩行発達現象をヒトやモノなどの環境との相互作用として捉えることとした。さらに乳児の独立二足歩行の獲得が、乳児期の大きな達成指標であることに鑑み、歩行発達を養育者の意識や文化的道具などにかたどられた重層的な現象として位置づける。そこで、Bronfenbrennerの生態学的システム論を下敷きに、対人的相互行為のみならず価値観・歴史・文化といったマクロシステムにおいて、歩行発達現象を理解することを目指した。

環境との相互作用による歩行発達（第2章）

第2章では、乳児の歩行発達現象のマクロシステムとして、モノやヒトとの相互作用において歩行発達を検討した。

第1節では、これまで歩行発達研究において取り上げられることのなかったつかまり歩きの分析を行い、つかまり歩き発達の構造が検討された。つかまり歩き形態の発達プロセスの検討から、把持形態においては重力方向への荷重に対応する四足歩行型から前部方向への荷重とモノの操作に対応する二足歩行型への推移が示され、つかまり歩きには這行寄りの形態と独立歩行寄りの形態があることが確認された。また、体向においては探索行為との関連による推移が見られた。

第2節では、母親が子どもの歩行を誘導しようとする働きかけを歩行発達援助行動として取り上げ、その分類と有効性の検討を行った。歩行発達援助行動は、子どもへの働きかけ方から大きく三つに分類された。歩行援助に成功した事例を検討することにより、母親が子どもの意図をうまく汲み取りながら適宜対応することが歩行発達援助行動の成否に重要であることがわかった。

第3節では、前節の知見を踏まえ、子どもの歩行発達と母親の行動傾向との関連を調査した。乳幼児期の子どもをもつ母親を対象として、子どもの運動スキル、子どもの歩行発達を誘導するような働きかけ、育児の情報源などについて質問紙調査をおこなった。分析結果から、「背後から子どもを支えて歩かせる」、「遠くのモノや場所への移動を促す」、あるいは家庭環境の工夫をおこなうといった母親の働きかけが、子どものひとり歩き獲得に影響を及ぼすことが見出された。

乳児の歩行発達を取り巻く環境システム（第3章）

第3章からは、子どもの歩行発達に関するより広い環境システムについて検討を進めた。

まず、第1節では子どもの歩行発達に対する母親の意識を調査し、そこに育児情報源がどのような影響を与えているかについて探った。結果、子どもの歩行発達を強く意識せず、歩くことへの働きかけに対して消極的な姿勢の母親は、「幼稚園・保育園の先生」、「きょうだい」といった情報源を重視する傾向があり、逆に早く歩けるようになることを望み、積極的に子どもに働きかける母親は、「両親」、「育児書」、「育児雑誌」といった情報源を重視する傾向があった。

第2節では、歩行発達を取り巻く社会・文化的価値観を大きな時間軸のなかで見返すことを目指し、価値観の変遷に曝されながら今なお利用されている育児用具に注目した。そして、乳児の歩行発達に関わる育児用具として歩行器を取り上げ、その歴史や価値の変遷を捉え、現代における歩行器の利用について考察を行った。

総合考察（第4章）

第4章では、これまでの研究を総括し、発展的な議論を行った。

まず、本論の課題として、環境の構成要素間の相互関係についての検討が不十分である点が挙げられた。そのうえで、歩行発達研究の今後の指針として「母子の相互関係の発達のメカニズム」、「文化的価値観の内化プロセス」、「事故」、「乳児の身体性・能動性」などをキーワードとした考察が進められた。

本論では、Bronfenbrennerの生態学的システム論を援用したことにより、歩行発達現象を取り巻く環境をより具体的に捉えることができたといえるだろう。この構造化は、今後、生態学的な観点から歩行発達現象をより詳細に検討するうえでの指針になると考えられる。